

坂の上の星雲せいうん

西郷 西盛

第一章 黎明編

第二話 別な話

※ 予告では、第三話は「空閑騎兵」という題でしたが、書いていくうちに、当初の予定と違い、空閑騎兵のはなしまで行きませんでしたので、題を変えました。「空閑騎兵」は四話にまわすことにしました。つつしんでお詫び申し上げます。

古代家が三浦半島に住んでいたのは、神代計画の本部が騒音問題対策などで東京湾外海上都市群に本部があったというのが大きな理由である。

三浦半島沿岸には、海上都市群の西の玄関口ともいうべきG-11号海上都市、通称「練馬海上都市」があることはすでに述べた。この都市の建設を当時の巨大企業である練馬重工業が担当したのが通称の由来である。建設した企業の名前が通称につく例は多く、他には、南部海上都市、揚羽海上都市、遣田海上都市、幌居海上都市などがある。

そもそも海上都市の建設は、二二二九年にヨーロッパ連合、イギリス州出身のゼルバードが海洋開発のための海上都市建設の必要性を世界にうったえたことに始まる。彼の本心は別にあつたのだが、表向きには「せまい地表に人々がしがみついているから争いごとがおこるのだ。地表の七割をしめる海洋開発こそ人類の平和と未来があるのだ。」

と、ゼルバードはそのためのノウハウの無償提供まで申し入れた。

「タダならば・・・」

と、多くの国がそれを歓迎した。世界中でちよつとした海上都市建設ブームというべきものが起きた。

大東亜諸国連合における海上都市の計画は、二二三三年に日本州出身の沖一郎の強力な指導で建設がすすめられた。沖一郎の父親は第三次世界大戦中の日本防衛海軍造船中将で、先に述べたミサイル戦艦眞秀場を設計した沖重造である。

沖家というのは四代続いた海洋一家で、船舶設計者の専門家を数多く輩出した。沖一郎も船舶設計が専門であつた。そのため日本の海上都市の基本設計は島岡漣しまおかきなみと海野広うみのひろしの二人の若手科学者が共同で担当した。

余談になるがこの二人には多くの逸話がのこされている。

第一号海上都市の完成間際に爆弾テロがあり、その直後に島岡漣が失踪したのだ。とうぜん漣が犯人だと疑われた。

当時、世界に先がけて太平洋上に海上都市を建設したネオ・ムー帝国が、世界の海を支配するために各国の海上都市にテロ攻撃をかけていた（と疑われていた）ため、漣もネオ・ムー帝国の工作員ではないかと噂された。漣を信頼していた（というよりも惚れていた）広は漣のふるさとの西海道（九州地方）は鹿児島県の指宿いぶすきまでたずねていった。彼女の祖父母にあつたようだが、結局ひとりで帰ってきた。

三年後、広は第一号海上都市に「マリンパレス」と名づけて失踪した。

広の友人で第四代海上都市群統合知事となった山盛正やまもりただしがその晩年二人の消息について語っている。

「漣さんは、事件のあとネオ・ムー帝国のやりかたがイヤになり、お母さんをたよって地球を離れたんだ。木星の衛星ガニメデ開発をしていたのさ。広も三年後に木星にいったのさ。え、広は何のために木星にいったかって？そらあ、漣さんをおいかけてにきまつてるさ。そこで広は海洋学のノウハウを生かしてガニメデを始め衛星エウロパやカリストの氷底海ひょうていかいの開発をしていたのさ。その水を太平洋合衆国の火星地球環境改造テラフオーミングに利用するためにね。今日火星に海と緑があるのは広と漣さんのおかげってわけさ。」

と、ひとつ話のように語っていた。もちろん、当時はあまりにも飛躍した話だったためにだれも信じていなかったのだが・・・。

ところが後年、ガミラスの遊星爆弾攻撃により海が干上がり、最盛期には数百を数えた海上都市群が壊滅した後に、

「もう時効だろう」

と、広が自分の子孫にだけ読ませようと書き残した回想録を「マリンスノーの伝説」という題で世に出したために、今では山盛正の話が本当だったことが知られている。もちろんこの物語の時点ではまだ知られて

いなかったことである。

漣の母親は木星開発に生涯をささげた日系太平洋合衆国一人世のナミ菜美・イザ伊座であることはいうまでもない。ナミは地球を離れるに当たり、すべての未練をたちきるべく幼い漣を母の実家である指宿いぶすきの島岡家に養子にだしていた。テロ事件を知り、極秘裏に漣をガニメデに呼びよせたのである。

2
守もさんのところの大東亜諸国連合の学制は、小学校六年、中学校二年の合計八年間が義務教育である。十四歳で義務教育が終わる訳だが、そのまま社会に出る子供はまれで、多くは高等学校（以下高校）と上じょう等学校（以下上校）へ進学する。

高校は大学進学をめざし、学問的内容中心の学習である。上校は就職あるいは上じょう等専門学校（以下上専）進学をめざし、学問的内容以外にも學術、技能などの実技的内容がカリキュラムに多く入っている。大学と上専の違いは、大学は学問研究を中心の研究機関で、上専は学術中心の実践機関である。医者为例にとれば、病氣の原因、治療方法などの医学を研究するのが医科大学で、実際に治療にあたる医者を養成、いわゆる医学を教育するのが医科上専である。もちろん、上校や上専から大学、高校や大学から上専に進学するものもあり、人生のコースはさまざまで

あつた。

二二世紀に、中学校卒業後に高校と上校に分けたのには理由がある。二〇世紀後半から二二世紀にかけて、東部亜細亜地区（当時の中華人民合衆国十極東歐羅西亞共和国を除く大東亜諸国連合）において大学への進学が豊かさへのパスポートだった（と考えられていた）。そのため、当時の高校は大学の予備校になりさがってしまった。の大学はというと、研究機関と就職のための学術機関の分化がかならずしも明確になつていなかった。結果として嫌応なく学問研究の予備軍に全ての子供がされてしまったのである。そのため記憶力と数学的处理能力のある人間が上位にたつという現象がおこつた。（これは太古に中華地域を中心に行われていた科挙の影響かもしれない）

どうも学問には興味が持てない、あるいは向いてないという子供たちは悲惨であつた。自分の不得意分野での競争をしいられ、結果多くは敗者となり必要以上にコンプレックスをいざくこととなつた。その鬱屈したエネルギーが多くくの学校で反社会的行動となつてあらわれた。いや、むしろエネルギーを爆発させることが出来た者はあるいはまだ良かったかも知れない。経済発展と共に多くの国で少なからずの生徒がドロップアウト——登校せずにひきこもつたりした。学校教育が崩壊の危機にだつたわけだ。

これをなんとかせねばと、さまざまな小手先の改革と大きなゆりもどしを数多くへたあとに

—— ようは学問以外の価値観をしめせば良いのだ ——

と結論つけた。高等学校を学問と学術を分けて上等学校が設置された。

3
一五歳で練馬重工業が創立した練馬大学附属海上都市高校に進学した守さんこと古代守が小笠原海上都市の海底遺跡発掘スタッフのアルバイトをはじめたことはすでに述べた。日本海溝につづいて伊豆・小笠原海溝でも「ゼスの海底遺跡」が発見された。この宇宙考古学における新たな発見の発掘スタッフに採用されたのである。

余談になるが、ここで守さんの叔父、古代守翁が提唱した宇宙考古学について述べてみる。

宇宙考古学のはじまりは、二二三六年のナミ・イザによるガニメデ遺跡の発見である。ガニメデ基地から知的生命体が建造したと思われる遺跡のような写真を送ってきたのだ。もつとも当初は自然岩が偶然人工物に見えるだけのようにも感じられ、多くの科学者は

—— 自然が作り上げた偶然 ——
と切り捨てた。

そんな中で当事二八歳の新進気鋭の考古学者であった古代守翁（もちろん当時は若かった）がいち早く地球と宇宙の関係を太古から研究する必要性を訴え

「宇宙考古学」

を提唱した。この説は当然学会から無視され、守翁は学会から追放された。職をおわれた守翁は極貧にあえぎながらも研究をつづけた。

研究といっても、直接ガニメデまで調査にいけるはずもなく、各地の神話・伝説や二〇世紀ころから宇宙人來訪の証拠などといわれていた、いわゆるオーパーツの再検証を行う程度のことしかできなかった。

自体はめまぐるしく。それも守翁の有利なように動いて行つた。二二三八年に地球と木星の間にある小惑星の仲間と思われる準惑星オルバースを日本所属の探検隊である。守さんの祖父のハーロックと森明もりあきのチームが発見し、そこでも遺跡が発見された。さらに、二二四一年にはエウロパの氷底海で、翌二二四二年にはカリストでもアメリカチームによつて海底遺跡が発見されたのだ。（公式記録では消されているが、「マリンスノーの伝説」によれば海野広のチームが発見したとされている。あらたな研究が待たれるところである。）

この後の展開は劇的でさえあった。さつそく探査チームが組織され木星宙域に派遣された。ここで、いちはやく「宇宙考古学」を提唱し

たん学会から追放された守翁がそのメンバーに選ばれた。

調査の結果、おおよそ二万二千年前の遺跡であることがわかった。

その後も発見は相次ぎ、二二四八年には準惑星セレスでも発見された。

—— はたして遺跡を造つたのは地球外知的生物なのか ——

という疑問がこのころの宇宙考古学最大の関心事であった。なんとも不思議なはなしだがいくら調べても化石など遺跡を造つたと思われる知的生物そのものの痕跡がまったく発見されなかった。そのためこれらの遺跡はなんらかの理由により短期間の滞在が目的ではなかったかと思えられるようになった。

4

もちろん、他の星系から太陽系探査などのための來訪者が滞在したのではないか。などという意見もあった。ただ、このような意見に対しては——— それならば、当事の人類との接触はなかったのか———

という当然の疑問に明確に答えられるものもなかった。一部には接触した痕跡のようなものを遺物のなかからむりやりこじつける者もいたが説得力はなかった。また逆に、地球から飛び立った知的生命体がいいたのではないかと考える研究者もいたが説得力はなかった。

なにぶん二万二千年前といえは、人類がやつと農耕らしいものに手をつけたくらいところで、メソポタミアやエジプトにはじめて文明といわれるものが勃興するまでさらに数千年を待たねばならない時代である。

記録など残っているわけもなく、このまま迷宮入りかと思われた。

そのような状況が大きく変わったのが日本海溝での海底遺跡の発見である。この遺跡の特徴はガニメデなどのもときわめて共通点が多く、なにより遺跡の主とも言うべき知的生物の化石まで出土した。その生物はDNAの調査の結果、われわれ現生人類とほぼ同じ哺乳類霊長類目ヒト族に属する生物であった。

その後の詳しい研究により、平均身長一八〇^{センチ}、体格はわれわれよりがつしりした頑丈型ヒト族に属し、脳容積は我々の平均値(約一三五〇cc)を上回る約一四五〇ccもあることがわかった。現在知られている化石人類の中では、頑丈型新人、いわゆるネアンデルタール人に一番近いことが確認された。ネアンデルタール人とは華奢型新人とも呼ばれる現生人類の最も近縁種といわれる人類である。

この海底人類は霊長類としては海棲新人と名づけられた。ただ、文字資料などの研究から彼らは自分たちのことを「ゼス」と総称していたことがわかった。以下は彼らのことを「ゼス」とよぶこととする。

読者諸兄には釈迦に説法と苦笑されると思われるがここで人類の進化の概略をおさらいしてみる。

七百万年前ころアフリカ大陸で原始猿人(サラヘントロプス、アルデ

イピテクスなど)が類人猿から進化したのは周知のことである。彼らは

人類最大の特徴のひとつである直立二足歩行を始めた。四百万年前ころに華奢型猿人へと進化し、より安定した直立二足歩行と、樹木や骨を使った道具を手に入れたと考えられている。三百万年前ころにアフリカの乾燥化が進み、食糧不足からそれまで食べられなかった硬い木の実なども食べられるように進化した頑丈型猿人と、今まで行ってこなかった肉食(雑食をはじめ、最初のヒト族と呼ばれる原始原人に枝分かれした。

高カロリーの肉食は人類に劇的な進化をうながした。脳の巨大化である。

その後も人類は進化を続け、二百万年前ころには原人が誕生し、七〇万年前には旧人(二〇世紀頃にはネアンデルタール人を旧人と呼んでいたが、今日ではホモ・ハイデルベルゲンシスを旧人と呼んでいる)に進化し、二五万年前ころに頑丈型新人と華奢型新人に枝分かれした。

ネアンデルタール人は体格もわれわれよりもすぐれていて、脳も大きかったが、さまざまな遺跡の研究からわれわれより知能が低かったようである(石器の精度などから推定)。脳の大きさと知能の高さは単純に比較できないようである。かれらは、当事の寒冷地であるヨーロッパからシベリア、モンゴルあたりに多く分布していたが、二万年前ころに、イベリア半島での遺跡を最後に絶滅した。ちなみに、ネアンデルタール人

の名前の由来は、最初にその化石が発見されたドイツのネアンデル渓谷ケールからである。

古代守翁もこのころ太古の地球の記録をあさっていた。このとき、初めて宇宙考古学を提唱したころの不遇の時代の研究成果が生かされたのは皮肉ななしである。やっとみつかったのが古代メソポタミアの石版に書かれたシュメール神話であった。ゼカリア・シツチンが唱えた惑星「ニビル」仮説である。

シツチンは二十世紀から二十一世紀に活躍したアゼルバイジャンはバクー生まれのパレスチナ育ちの考古学者である。彼のシュメール宇宙論の解釈の概略は以下のとおりである。二三六〇〇年周期の楕円軌道をとる惑星「ニビル」が火星と木星の間にあつた惑星ティアマトと衝突し地球や小惑星を形成した。ティアマト人の遺伝子操作によつて、ホモ・エレクトス 原人からホモ・サピエンス 現生人類が生まれた。」というものである。もちろん当時の人々の多くは相手にしなかつたトンデモ説である。

古代守翁は、シツチンの説を基礎として、プラトンのアトランティス伝説やマヤ文明のトロアノ絵文書、ヒンドウー教のナーカル碑文。さらにはシュメール神話の—— 文明は海からもたらされた—— という伝説や、ノアの箱舟の元となつたとも言われる大洪水伝説などを組み

合わせて独自の説を構築した。どのような説かは後に詳しく述べるのでここではふれない。

話を守さんにもどす。当事の宇宙考古学研究所所長は、古修司ふるしゅうじといつて、元々石器時代の古代美術の研究が専門であつた。古代守翁に触発され宇宙考古学にくら替えしただ。後にはプロメテ計画に便乗して太陽系外にも調査を広げることになるが、そのことには深くはふれない。

直接守さんの上司となつたのは、遺跡発掘責任者である宇宙考古学研究所副所長の三本足進である。この人は、守さんの叔父の古代守翁の直接の弟子だつた人であり、古代進の名前のもとなつた人であることはすでに述べた。

—— 師匠と同姓同名の高校生がアルバイト応募の中にいる。小論文を読んだ限りではかなり優秀である。——
という報告をうけた三本足が、なんとなくつかしみを感して採用した。ところが

「宇宙考古学を提唱した古代守は自分の叔父です」
ということ、はからずも師匠の身内を部下に持つことになってしまった。運命とは不思議なものである。

「まことにもうしわけないことだが、またまた余談となる。(物語記事の世界の状況を知ってもらわないと今後の話の内容がつかみにくいので今回ご勘弁ねがいたい・・・)」

三本足進と古代守翁の出会いは一六三三年のアフリカである。

このであいについては、三本足の回想録「宇宙考古学事始」第一章の「サケザン」や、いきががりでサケザンの使者をつとめ宇宙考古学にも深くかかわることとなる物野分もののけしめが書いた子供向けの伝記「古代守先生物語」の中の「サケザン雷帝の巻」に詳しい。二人の著述は大筋では同じだが、細部には違いも多い。理由はわからない。

アフリカ

という、二十二世紀になってもなお未開のジャングルが多く残るこの地域は、中南米とならんで遺伝子ハンターたちの恰好の狩場となっていた。

製薬会社が新しい抗生物質を開発するときには、その元となる新種の遺伝子を手しなくてはならない。土の中の細菌や新種の昆虫、猿など動物の肝臓などを集めてきては、病原菌やウイルスに対する抗体などを調べ、見込みがありそうなものをさらに厳選して新薬とする。新型の抗生物質を開発すれば数百億リング(当事の通貨単位。二十一世紀初頭、こ

ろの日本の円と同程度の価値)規模のビジネスとなるから、世界中の製薬会社がこの宝探しに専門の人員を雇っている。この者たちを遺伝子ハンターといった。

大学で遺伝子工学を学んだ三本足進は腹立製薬はらたぢにつとめていた。契約している遺伝子ハンターたちから有望な遺伝子かどうかを見極めて買い取る仕事をまかされていた。本人は、生物の進化の秘密をさぐるような研究がしたかったのだが、ちょうど不況の時期では生きるために贅沢はいつていられない。

7

アフリカにやってきた三本足が、中南部アフリカ連合エチオピア州のアディスアベバからガボン州のリーブルビルへ移動のチャーター機がトウルカナ湖を越え、ウガンダ州とコンゴ州の境あたりのジャングルへ強行着陸したことがことのはじまりであった。このチャーター機のパイロットはハラマラド・メメドライロ・ナニハラジャランドラという元黒人解放運動のゲリラであった。この機には三本足以外に二組四人の便乗者がいた。一組目は古代守翁と物野分けしめであった。もう一組はヨーロッパ連合イギリス州出身のジェーンとヤルボイのサセソーネ母子である。この二組は最終的な目的は違うのだが目的地は同じであった。どちらもトウルカナ湖近くのジャングルへ行きたかった。古代守翁とジェーンが共謀してこの強行着陸を決行させたのだが、方法はいたってシンプルであ

る。ハラマラドにジェーンが

「主人が眠る土地をひと目みたいので着陸していただけじゃないかしら」

と涙ながらに哀願するとうものだった。人情にあつく涙もろいハラ

マラドは大いに同情して強行着陸となった。もちろん三本足はカンカン

に抗議した。古代守翁は

「情けは人のタメならず。どうせ、あんたの金じゃあるまい。会社の金

じゃろ。広く言えば大日本株式有限会社の金じゃろ。してみりや、これ

も外交の一環とおもえばいいのじゃ」

などとなくさめてみたが、なかなか納得しない。なぜジェーンのダン

ナがこんなジャングルに眠っているのかなどしつこくきくから、当事十

五歳のヤルボイが

「ネホリハホリきくやつはモテないぜ」

と、ませたことをいった。三本足は

「コブつきにもモテたつてしかたがない」

と、うそぶいたが、古代守翁が

「バカメ、おまえ、子供一人ぐらい産んだ女のほうが色っぽくてきれい

なもんだ。しかしチミ。ありやーいい女だよ。わしがもう少し若ければ

ああいう女ならコブつきでも結婚したいものだね」

と、はぐらかして、三本足もそれ以上は言わずあきらめた。たしかに

ジェーンは当事三十代後半だったはずだが、残っている画像を見るかぎり二十代前半でも十分通用する美しさだった。

ジャングルに着陸してからが大変だった。チャーター機が新種の類人

猿に襲われたのだ。一見すればチンパンジーに似ているが、身長は一四

〇^{センチ}糲とチンパンジーより大柄で、完全な直立二足歩行を行い手には棍

棒までもっていた。その姿は猿というよりひとに近く、類人猿というよ

りむしろ類猿人とよんだほうがその生き物の本質に近いと思われる。

三本足たちは応戦したが、多勢に無勢でチャーター機は破壊されてし

まった。類人猿たちの目的は、ハラマラドが便乗してチャーター機で密

輸しようとしたウイスキー二十ダースの強奪であった。おかげで全員か

すり傷程度ですんでいた。

とにかく三本足一行六人はサバイバル生活を余儀なくされた。このと

きハラマラドがゲリラ時代につちかったサバイバル術がおおいに役立つ

た。ただ「サケザン雷帝」では物野本人が食料となる獲物を自分がよく

採りにいかされたと、サバイバルの功績は自分にあると書いている。思

うに、ジャングルから脱出したのちに、頼りがいを感じたジェーンがハ

ラマラドと再婚したことから考えると、ハラマラドの活躍の方が正しか

ったように思われる。あるいは、物野が獲物を採ってきたのは最初の遭

難の時（後にものべるが物野はトウルカナ湖近くのジャングルで二度遭難している）のことで、記憶があやふやになっていたのかもしれない。

数日して類猿人の王様があらわれた。その王様こそ文化人類学者のサケザン・サセソーネである。（物野は類猿人たちの王であり、類猿人たちの激しい襲撃の記憶から「サケザン雷帝」という章タイトルを思いついたと回想している）

そこではじめてわかったのだが、サケザンは十二年前に野生のチンパンジーの生態観察を目的に一人でジャングルにやってきた。自給自足の生活で、外部との通信手段もろくにもたない世捨て人のような生活をしてきた。実はジェーンはサケザンの奥方で、夫が研究に没頭しすぎて家族をかえりみず十年以上も音信不通なのにたまりかね、息子のヤルポイをつれてここまで訪ねてきたのだ。

いっぼう古代守翁は

—— 宇宙考古学に関係すると思われる重大な発見をした。現地に来て意見を聞かせてほしい ——

と、サケザンから連絡をうけて、文字通り飛んできたのである。たまにたま現地に墜落した飛行機のたった一人の生き残りである物野をサケザンが助け、そのお礼にと古代守翁への使者を引き受けたのである。守翁がアフリカは初めてだったために物野にガイドをたのんだ。物野は

「これも何かの縁」

と、快諾した。サケザンのたのみといい、古代守翁のたのみといいどちらもなかなか無理な要望と思われるのだが、きちんとひきうけこなしたところから物野の人の一端を知ることができる。

サケザンが発見したのは、後に化石円盤第一号とよばれることとなる太古の昔に飛来した宇宙船の遺跡である。化石円盤はトウルカナ湖近くのジャングル奥地の約三〇〇万年前の地層に埋まっていた。当地にチンパンジーの研究に訪れたサケザンは、まさかこれが宇宙からの飛来物とは思わず、第三次世界大戦中の兵器かなにかだろうと思っていた。発見当事に朽ち果てた内部をいじってみたら、一瞬作動して、淡い光とキーンという超音波のようなものを放射したあと永久に沈黙した。それにしても、化石円盤だったから良かったものの、爆弾かなにかだったら死んでいたのにとりあえずいじってみるといのはいかがなものかと思う。たいた度胸というか何というか、サケザンという人物は我々にははかりがたいところがあると思うのだが読者諸兄はいかがであろう。

その後、化石円盤は打ち捨てられていたが、おかしなことが起こりだした。新しく産まれたチンパンジーに直立二足歩行をするものがチラホラ表れだしたのだ。また、その他にも二足歩行を行う恐竜のようなトカ

グが現れたり周囲の生物が急激に進化したとしか思えない現象が次々とおこった。観察を続けた結果、あのときの光と音波が原因ではないかと思に至り、化石円盤による人工進化ではないかと結論付けた。そこで、こういうことの世界の権威である古代守翁に連絡したというわけである。

化石円盤の調査の一向はしばらくサケザンとジャングルで生活した。ジャングルでの生活は意外と快適なものであった。くだんの類猿人たちが、サケザンの命令には絶対服従で生活の世話をしてくれるのだ。チンパンジー以上の知能を持つ彼らは、サケザンの指導により、簡単な農耕や牧畜も行ってた。先に述べた恐竜のようなトカゲも飼育されていたので、つぶして食べてみたら鶏肉のような味がして美味であった。そうである。また、新鮮な果実や、それを発酵させたアルコール（これがまことのサル酒か？）もあり、特にこのサケを好んでいたサケザンが自宅に帰りたくない気持ちもわからずではなかった。

調査もおわり、いよいよ文明社会へかえることとなった。飛行機が壊れてしまったために、いかだを組んで川を下ることとなった。いざ、出発の日になって事件がおこった。サケザンが一人残ると言い出したのだ。

ジェーンが持参した離婚届を盾に

「わたしとサケとどちらがいいの。千匹エテカの類猿人やサル酒とこの私とど

っちがいいというの」

と、おどすように帰宅を迫った。サケザンはしばらくの沈黙のあと「サケの方がいい」

と、いいきり、離婚届にサインした。

この直後に思わぬ展開が待っていた。ジェーンはあきれはててサケザンを見限ったのだが、息子のヤルボイがサケザンと一緒に残るといいたした。サケザンもこれにはまいったようだったが、息子の情熱にほだされ、最後には

「好きにしる」

と、二人で残ることとなった。

このとき、サケザンの自由奔放な生き方に感銘をうけた三本足進は、帰国後会社を辞めた。（もつとも、化石円盤の発見により、遺伝子工学が劇的に発展し細菌やウイルス治療の抜本的な変化が起こり製薬会社の多くは淘汰され、腹立製薬も倒産することになるのだが）自分のやりたいことをやろうと古代守翁に弟子入りし、重主に宇宙考古学の遺伝子解析分野で研究のサポートを行ったのは周知の通りである。

古代守翁の帰国後、化石円盤はすみやかにジャングルから運び出されて全地球的国際研究団によってすみずみまで調査された。全地球的組織

で調査されたのは、史上初の地球外知的生命体の発見の成果を、一国または一連邦国家が独占したら紛争のもとになる。と古代守翁とサケザンが話し合って決めたことであった。

調査の結果、たしかに特殊な放射線を発して生物のDNAに影響を与え進化をコントロールすることも可能な装置ではないかと報告された。なにぶん三〇〇万年という年月は化石円盤に多大なる腐食と崩壊をもたらしていてもはや修復は不可能であった。(もつとも老朽化がなくても当時の地球の科学技術で修復できたかはあやしいが・・・)

しかし、完全ではないとはいえ、当事の地球にとっていわゆる超水準技術ハイパーテクの入手は遺伝子研究や通信分野などで飛躍的な進歩をもたらした。特にその推進機関エンジンの仕組みの一部が解明され、ごくごく原始的ながら波動エンジンらしきものが開発された。核融合エンジンなどを駆使して何とか光速の三割程度の速度しかもたなかった宇宙船が、一気に光速の六割程度まで出せるようになり、神代計画ははじめ各地域の宇宙開発の発展に大いに貢献したことはすでに述べたとおりである。

古代守翁はこの発見から三年後に「宇宙考古学概論」を世に出した直後に病に倒れ帰らぬ人となった。その論旨をここで簡単に述べておく。

11

三〇〇万年まえにどこかの星。おそらく銀河系内の星の知的生物が銀河系内、あるいはもつと広範囲に化石円盤を派遣し生物が存在する星に知的生物を進化により産み出そうとした。理由はおそらく、自分たち以外にも知的生命体の仲間がほしかったのであろう。

方法としては、おそらく人工的進化によって何百万年もかけて、その星の知的生物に近い生物をつくらうとしたのだろう。だから、星ごとに進化の特徴の違い(肌の色、指の本数、大まかなサイズ、耳、鼻、首などのパーツのデザインなど)はあれど、基本的に遺伝子的に近い、いや同種といってもよいDNAを持つ知的生物に進化した。(あるいはお互いの交配も可能かもしれない)このような知的生物が銀河とその周辺の伴銀河に多数存在するはずである。

地球では、この知的生命体が二種類表れた。ひとつはわれわれ現生人類ホモ・サピエンス。もう一つが頑丈型新人である。

二十数万年前にほぼ同時機にアフリカのトウルカナ湖周辺のジャングルで進化した両者は共存共栄を図れなかった。現生人類の繁殖力と攻撃性が強すぎて頑丈型新人を圧迫し始めた。もともと争いを好まない頑丈型新人は現生人類と生存競争をさげ、アフリカを出て現生人類ホモ・サピエンスのいない極寒のヨーロッパやシベリアに適応して生き延びた。平和な何万年かの後、現生人類の繁殖力ホモ・サピエンスはついにアフリカを出でて、ヨーロッパや

シベリアにまで進出してきた。頑丈型新人はさらに辺境に追いやられ、氷期には水位の下がった。現在の大西洋にまで住み着いた。二万年ほど前に氷期が緩和のされ、そのための海面上昇がおこり海の孤島にとりのこされた頑丈型新人は次第に沈みゆく大地を前に生活の場を海に移すことを決断した。海棲人類の誕生である。海への適応が彼らに劇的な変化をもたらした。もともと脳容積が現生人類より大きかったことはすでに述べていたが、海中生活が知能の発達をうながした。科学文明を海棲人類の方が遙に早く発展させ宇宙にまで進出するようになった。それが1万2千年ほど前のことである。彼らは陸上人類とも交流があったのであろう。これらがシユメールの海から文明がもたらされた伝説や、アトランティスやムーなどの海中に没した文明の伝説となったのである。ゼスたちはよほど争いを好まない平和的な人類だったのだらう。彼らは、いずれ同等に科学文明を発展させるであろう陸上人類との軋轢をおそれ、他の惑星への移住を決意した。その惑星はおそらく表面を水で覆われ、恒星から遠いところでは表面が凍り、内部は地熱などの影響で液体化した氷底湖がある惑星であらう。その星の名を仮にアクエリアスとする。(当初、古代守翁はシツチンに敬意を表し「ニビル」と名づけようと考えたが、「ニビル」は農耕神マルドウクの取り巻きで水惑星の名前になじまないと考え、「みずがめ座」のラテン語読みの「アクエリアス」に

した。)アクエリアスはおそらく地球に水をもたらした大洪水伝説をのこしたのであろう。

これが「宇宙考古学概論」の概略である。古代守翁は最後に

「ゼスたちは、太陽系を通過するアクエリアスの観察や移住用の基地としてガニメデなどに遺跡を残して去っていった。アクエリアスの軌道は不明だが、いつの日か太陽系に帰ってくるだろう。そのとき二つの人類が友好的に再会できることを強く願いたい。」

という言葉でしめくくっている。

12

おそるべき洞察力である。わずかこれだけの証拠をもとに、ほぼ正確に事実を導き出していたのだ。この同種のDNAをもつ知的生物を今日では「ダナサイト」と呼んでいるのは周知のとおりである。水惑星「アクエリアス」も二九三年に発見され約一万二千年周期の遊星であることが確認されている。古代守翁の最後の願いは、二二〇〇年に半分はかなえられ半分はうらぎられることとなるが、ここでは深くはふれない。

第二話 了

次回第四話 こんどこそ「空間騎兵」